

◇「遙かな尾瀬」

大槻伸次

昭和 40 年（1965 年）6 月 4 日、菱友会（後の菱馬会）主催の夜行日帰りの尾瀬ハイキングに参加した。

私自身、尾瀬と聞けばラジオ歌謡から生まれた♪「夏の思い出」が直ぐに頭に浮かんだ。そこで、このロマンチックな歌詞から連想する景色がいつのまにか心の中に定着し、一度は訪れてみたい憧れのところだったので。



♪「夏の思い出」は戦後間もない昭和 24 年（1949 年）6 月 NHK の「ラジオ歌謡」として全国に放送された。このラジオ歌謡がきっかけで尾瀬を訪れる人が急増したといわれる。そこで水芭蕉咲くシーズンには、国鉄沼田駅前尾瀬方面行きの臨時バスが連なると報道で聞いた。そこで、今回、菱友会より尾瀬ハイキングの募集があったから躊躇することなく仲間を誘って申し込んだ。

尾瀬行き当日は太田駅前に集合し、午後 10 時 50 分大型バス 2 台に分乗して出発した。国道 17 号を経由して沼田より尾瀬の登山口である大清水口へと向かった。大清水には午前 3 時 30 分、深夜の到着だった。バスの中で仮眠をとり開けやらぬ闇世の中を一路三平峠を目指して登りはじめた。

6 月というのに周辺の花々はまだ残雪が多く冬山のようにであった。大清水からの登山道は登りがきつく、思いのほかぬかるんでいて歩きづらかった。悪戦苦闘しながら三平峠到着。ここより三平下目指していき下る。すると突然目の前に、雪を纏ったやさしい姿の至仏山と尾瀬沼の幻想的な、そしてなんとも表現しがたい美しい風景が現れたのです。この風景に暫く絶句し言葉がなかった。初めて目にする尾瀬の風景は、自分が作り上げていたイメージを裏切らないものだったので。この日の天気は曇りだったが、それがかえって尾瀬の風景を絶妙な墨絵のようなものにしていただけ。

自然というのは人間の造作が及ばない絶妙なもので、神様はこの清らかな風景に似合う花として水芭蕉の花を作ったのだろうか。ところが、こんなすばらしい景色を目にしても記録するカメラの用意がなかった。そこで、通りすがりの女性に記念撮影をお願いしたら快く応じてくれて後に写真を送っていただいた。この女性は東京都品川区大井に住む S・F さんという超美人さんだった。この出会いが尾瀬の旅に花一輪添えロマンチックな明るい思い出として加わったのです。そして至仏山を仰ぎ見ながら持参していったジュースを雪の中に埋め、飲んだときの爽快感は格別だった。

こんな素晴らしい景色を目の前にして我を忘れて見入って、あっという間に時間は経過していた。時間に追いたてられるように次の行程にである長蔵小屋から沼尻まで移動。残雪をザクザクと踏みしめて歩いた。

帰途は、沼尻から長蔵小屋まではポンポン船に乗った。（当時は渡し船であるポンポン船が運航していた）長蔵小屋では魚釣り道具を借りて釣りをやったがぜんぜん釣れなかった。水清く魚住まずかと諦めることにした。ようやく訪れることができた遙か

な尾瀬もあつという間に時間が過ぎ、帰りの時間となる。午後 2 時には下山が終わり一之瀬休憩所にて一休みし帰路についた。
〔2022/4/20 記（当時のメモを基に再編集）〕

※作詞家 江間章子さん（新潟県生まれ。片品村名誉村民）は尾瀬に行ったことはなかったそうです。しかし、戦時中（昭和 19 年）、生活物資買出しのため群馬県内を訪れた際に目にした尾瀬の風景（多分写真かポスターだろう。）を歌謡にしたという。

尚、ラジオ歌謡で放送された昭和 24 年（1949 年）は敗戦から間もない時代であり、よくぞあのようなロマンティックな美しい詩が生まれたものである。まさに尾瀬は「夏の思い出」の詩そのものだったのです。

■写真右は、通りすがりの東京都品川区大井の S・F（女性）さんという方の撮影。後で送っていただいた。（当時は白黒写真・その後、何度か旅先の写真や絵葉書を送っていただいた。）
当時、カメラは貴重品で、我々は持ってなかった。

